

## 武蔵野日曜聖書講筈

## 聖意身証

## ——マタイ伝第7章21～23節——

1983年2月13日

小池辰雄

エホバの名 御意をおこなう者のみ 御霊の根源の世界 聖意体現は悲願 体受 十字架道を走る者 キリストこそ徴 極悪人の砕け 砕けを十字架で賜る 自分がすつ飛んでいる世界 聖霊は何ものとも代えられない ぶっ倒れることが信 信行一如

## 【マタイ7】

21我<sup>むか</sup>に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。22その日おおくの者、われに<sup>むか</sup>対して「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いだし、汝の名によりて多くの能力<sup>ちから</sup>ある業<sup>わざ</sup>を為ししにあらざや」と言わん。23その時われ明白<sup>あらわ</sup>に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

## ●エホバの名

21節から23節は非常に厳しい御言であります。

21我<sup>むか</sup>に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、

「主よ、主よ」

と、よく神さまの名前を連呼したり、キリストの名前を連呼したりして、祈りの中で、なにか祈りのつなぎみたいに言う人があるんだよな。今ここにあるとは言いません、かつてありました。

「7汝の神エホバの名を<sup>みだり</sup>妄<sup>みだり</sup>に口にあぐべからず」

と、出エジプト記20章のモーセの十誡——本当は「十言」ですが——の三番目に出ている。

「わが名をみだりにあぐべからず」

と。「主よ、主よ」と、いい加減な気持で言うなど。御名は畏るべきものです。もちろん、畏れをもって親しむべきものです。畏れ親しむ。慣れっこになってはいかん。

「エホバの名」

はヘブライ語で

「シエーム ヤーヴェー」



という。「ヤーヴェー」が「エホバ」の本当の名前です。この「ヤーヴェー」の字は「アドナイ」と読んだ。妄りに名をあげてはいけなから、経典を読むときに

「アドナイ」(わが主)と読んで、

「ヤーヴェー」

とは言わない。そのうちに、これはいつたいもとは何と読んだかわからなくなってしまった。ヘブライ語というのは子音ばかりですから、母音が分からなくなってしまう。「アドナイ」の母音をつけたら、これが「エホバ」と読めるようになるんです。だから、「アドナイ」(わが主)の母音と「ヤーヴェー」という——これは「実在者、実存者」という字です——子音とを混ぜると

「エホバ」

という発音になる。だから、私は「エホバ」を

「実存主」

と訳す。「アドナイ」の主と、「ヤーヴェー」の実存を合わせて、「エホバ」を実存主と訳す。読み間違えたこの読み方がおもしろいから、私は今も「エホバ」という読み方を使っている。それくらいなまでに、ユダヤ人はエホバの名前を、ヤーヴェーの名前を懼れ畏んでいたわけです。

### ●御意をおこなう者のみ

だから、妄りに、

「主よ、主よ」

と言ったって、それで天国へ行けるなんて思ったたら、それは大間違いだと。

ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。

これは非常に重大な言葉です。

「父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし」

と。

「信仰ではダメだ、行わなくてはダメだ」

と、そういうことですよ、簡単に言うとは。

「信仰、信仰なんて言っているけれども、プロテスタントの信仰なんか観念信仰で入れるか」

と、こういうわけです。正直、観念信仰だったら、あぶないですよ。キリストははっきりこう言ってるしやるんだから。

ところで、聖書というのはおもしろいですね。ヨハネ伝の6章29節を見ますと、

「<sup>29</sup>イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信する是れなり』」



とある。神的な業というものは——「わざ業」という字は単数で書いてある——  
 「遣し給える者を信ずる是れなり」という。

「神的な行為というものは信ずることだ。信ずる他に何もいらん」と。  
 あのキリストの一番弟子のパウロが、

「信仰によって義とされる、救われる」

と言った。救われるのは行為によるのではない。信仰だけだと。ルターは

「ただ信仰のみによって」

と、「のみ」をつけた。ガラテヤ書のあるところにはギリシヤ語では「のみ」はないんです。それをドイツ語訳にするときに、ルターが「のみ」を付けた。要するに、ルターは非常にパウロ精神をつかまえて、

「信のみだ」

と言った。それで、

「信仰によって義とされる」

ということが金科玉条になってしまった。ところが、こういう非常に大事な言葉がまた観念になってしまふ。

そうかと思うと、今度は、

「おこな行為によってのみ天国に行く」

というので、とにかく行わなければいかんと言って、一生懸命で行為に今度はこだわってしまう。自分の行為が天国を勝ち取るかと思う。それで、ルターは修道院で本当にごんぎよう勤行したわけだ。禅宗でもそうです。これはみんなしやうどう聖道門だ。自分を鍛えて、そしてそのただ義しき行為によって天国へ行こうとする。

「もし、修道院のあの勤行によって天国に行けるといふなら、私は誰よりも確かに

天国に行っているはずだ」

と、マルチン・ルターは言いました。ところが、ダメなんです、その行為が。本当の行為はそこから出てこない。

「行為、行為」

と言って、信仰がお留守になっている。

「信仰だけでもダメだし、行為だけでもダメだから、両方混ぜてやれ」という。カトリックが多少、そういう面がある。

この頃、日曜日の朝にNHKテレビで「心の時間」をやっている。今日も、カルメル修道院の僧侶と禅宗の坊さんが対談をやっていた。さつき、私はじつと聞いていた。両方もねらいはいいいんだけれども、もうひとつ足りない。私みたいなやつは、ああいうところまで話させてくれないだろうね。もちろん、両方とも立派なひとです。人間そのものを私は



批判しているのでも何でも無い。

では、どうしたらよかろうか、ということになる。

「御意を行う者のみ天国に入る」

と。ここには「のみ」が入っている。

### ●御霊の根源の世界

キリストの言葉はギリシア語ではないですから、本当は

「ギリシア語原文」

なんて言ったって、原文それ自身が本当はあやしいんだ。「ギリシア語原文」なんて言って、ギリシア語のテキストをまたえらく金科玉条にする註解者がいてね、私は鼻もちならんよ、ああいうのは。ギリシア語であろうと、ヘブライ語であろうと、それは研究することは結構だけれども、それで捉<sup>つか</sup>めるなんて思ったら大間違いだ。私みたいなことを言うやつはないのかね。おかしいね。もうひとつ奥<sup>おく</sup>の響<sup>こた</sup>きを受けとらなければダメなんです。

キリストでも、パウロでも、

「いつぺん言ったことをまた言ってみろ」

と言われたって、それは忘れてしまっただけで言えやしない。また別な表現で言いますよ。神の言葉なんてのは、その時その時にいろいろな花が咲いているだけの話で、その元が本当に捉<sup>つか</sup>めなければ、今度はその花にこだわってしまう。花の咲き方だって、いろいろなんだ。いつも、たずねたいのは、神の根源語です。

音楽のこのころの分かるひとには聖書は読めるはずです。音楽の音は全世界の人に通ずる。その音において何を捉<sup>つか</sup>むかは、その人その人がその時その時において、その音を通して本当に捉<sup>つか</sup>むものがあるわけです。作曲家はそこから出発する。そうでないような技術的な作曲ではダメです。絶対にこの御霊の信仰に本当に深く入らなければ、歌を歌うにしろ、作曲するにしろ、何をやるにしたって、この御霊の根源の世界に入らなければダメです。医療をやるにしたって、学生が勉強するにしたって、何でもそうです。エペソ書ではないが、

「キリストと一つ」

の世界なんです。根源は一つです。一如の世界です。

先日の集会で、そこに入って私はグーツときたら、私は知らないうちにルカ伝9章29節のように白き衣を着たようになってしまったらしい。後でそれを聞いて驚いた。今ここにその証人がおられる。私なんかまだまだです。私は限りなく進みます。霞の中に入ってしましますから。そのうちに、見えなくなる。

「もう、先生にはついて行けないから、この辺でよそう」

なんていう人は、どうぞ、よしてください。私は独りになったっていい。私は本当はそうじゃないんだよ。私はあなた方のしんがりで行く。あなた方を霞の中に入れて、それから、



私がしんがりでトボトボと行く。私の本当の姿は一番後から登って行くんですから、間違えては困る。

春の京都の集会、夏の特別集会、秋の京都の集会、また、それぞれの召団に私が時々お伺いします。私の話の録音も、また録画もいいよ——録画ならだいたいいいけれども——けれども何と言ったって、やっぱり現場で直に私の破れ切った器の——私は破れ切っているんです、もうはつきり言いますから——この破れ切った器を通して発するところのものを、あなた方が身体でビーツと受けとらなければね。いいね。これが私たちの集会の生命なんだから。

もう、概念の世界ではない。この福音を、ペテロ、ヨハネ、ヤコブが捕まえさせられたその福音を再現しないではいられないんです。

「汝らはいよりも大なる業をなさん」

「私はお前たちの中に入って、もつと大きな仕事をするぞ」

とキリストは言っただけでしやる。あなた方は、

「自分がどうだこうだ」

なんて思うことはひとつもない。その境地を私は無と言っているんだ。日本中のキリスト教界がこの無を理解してくれなくなつて、私は一向差し支えない。ひとつも水を割らないで行きます。誰が何と言おうと、どう誤解されようと、もう私は本当に平気なんです。もう絶えず前進している私を、前進していないかのごとくに判断している人はみんな自分が脱落していく。私ははつきり言う。そういう事態です。

### ●聖意体現は悲願

それで、「信と行」をどうしてくれるかということ。キリストは

「御意を行う者のみが天国に入る」

と言う。だったら、キリストは十字架に架かる必要はなかったんだ。もし、キリストの言葉に、ただ言葉に執着したならば。キリストの言葉といえども、ただ言葉に執着したらダメです。何のための十字架か。なぜ、キリストは十字架に架からなければならなかったか。私たちは自分ではどうにもならない。

どんなすぐれた坊さんや何かが語っているところを見ても、結局は最後のところには来ていない。最後のところに来たのはキリストだけです。その無限無量な世界を現じていたひと。神さまの聖意を——私は「聖意体現」ということをよく言っているが——この聖意体現を無条件にできたのはイエス・キリストだけです。聖意体現というのは大変な言葉です、これを瞑想するだけでも。

「父の聖意を行う者のみ、これに入るべし」

と。これに入ったのはキリストだけ。だから、



「聖意を行う者のみこれに入るべしとあるから、さあ、聖意を行いましょう」

と言ってやってごらん。どこかでくたびれてしまうから。キリストのどの言葉も、私たちは及第できない。及第できるなんていう錯覚をおこして、一生懸命でこの御言に執着してごらん。終いにはくたびれて、倒れてしまうから。それをいろいろ勿体ぶって言っているんだよ、ラジオやテレビで。キリストが聖意体験できたのは、もうひとつ次元が違う。

「聖意の天に行う如く、地にも成させ給え」

と祈ったキリストの「主の祈り」を、教会ではみんなこれを祈っている。空念仏みたいに。私たちはそれをやらない。無教会でもやらないけれども。なにも、やらないからいいのではない。本当にそのような祈りが出てきたら、大いに祈ってください。これは私たちの悲願なんです。聖意体験は悲願だ。どれだけ聖意体験ができていくか、そんなことは知らん。とにかく、これは我々が悲願としてるところ。その悲願が、量的にはなくて、質的にいかにして可能であるかということ。問題は質の問題です。

### ●体受

「神の業は、遣わし給いし者を信ずるこれなり」

とは、

「神の業は、遣わし給いし者を受けとることこれなり」

ということ。「信ずる」というのは

「受けとる」

こと。キリストはこういう素晴らしいひとであったという事柄をいくら信じたってダメです、そんなものは。それは観念です。遣わし給いし者を受けとらなければダメだ。受けとる。全存在で受けとることを私は体受と言っている。体受することが本当の信仰なんです。信じ交わる信交であって、信じ仰いでいるのではないんだ。信受と言ったって、体受と言ったっていいよ、中身さえ分かれば。全存在で受けとることです。

「ああ、水が飲みたいな」

と言って、水を飲むときには、これは水を体受しているんだ。ご飯を体受している。「食べている」なんて言わなくなっちゃっていい。本当は、体受している。身体からだで受けとっている。血となり肉となつていく。そうでしょ。みんな身体に化するんだ。化体していくんだ、食物が。

大自然への公害現象をなくすため、無農薬の野菜や果実を本当に作っていかなければ、自然に即しなければダメだと言ってやっているのがK君だ。彼はその祈りをもつてやっている。自然に即せと。そうしたら、体受するものは自然を受けとっている。我々は大自然を体受する。だから、そういう食物は非常に身体にいいし、大自然と一如の世界に入る。そういう食物でなければ、大自然と一如の世界に入れない。



この文明なんていうものは曲がった文明で、冗談じゃないよ。なにか店頭でちょっと見栄えがよければいいということ、色を塗ってみたり、妙に磨いてみたり。実に袋をかぶせなくたっていいんだ。太陽の光を直接に受けて実る。もともと袋をかぶせて果実はできたものではない。虫の食わないものを食っているんだから、今は。本当は、虫の食うものを食わなければいけない。虫がおいしいと思って食べるものを人間も同じくおいしいと言って食べる。それが本当の食物なんだ。化学薬品で皮の上に毒がぬつてあると、虫は食わない。ちゃんと虫はわかっているから、あんなものは食えるかと。人間はそれを食べている。バカげた話だ。虫以下になっている。

「我は虫なり」

なんて言うけれども、あれは聖書はまちがっている(笑)。「我は虫なり」よりか  
「我は虫以下なり」  
だ。

### ● 十字架道を走る者

そんな世の中になってしまっている。全く、すべてが狂ってきた。中学生が浮浪人を残酷に殺してみたり。先生に向かって集団で暴力を振るったり。そんなことをいい気になって、なんののかんのとただ報道していることで、何になるかと言うんだ、日本は。未成人を一人前の扱いをして、生徒に対して

「あなたはどう思うか？」

なんて。

「しつかり学べ。先生の言うことを絶対に聞け」

と。昔は、「先生」というのは私たちに、本当にもう絶対的でしたね。先生でも親でもそうです。「でも」なんて言えやしない。

「はいっ」

と言って、やってたんだ。上の人が封建的な権威をふるったら、それはいかんけれども。それだけ本当に信愛関係になっていけば、これは一番問題のない世界なんです。労資の関係だってみんなそうです。問題はみんなそこに帰着する。

今、原子爆弾なんかより恐いのは、日本人の心の在り方です。だから、そういうことに対しては敢然として真理を行じていかなうはいかん。そのためには、十字架道を走る者が天国に入る。

### ● キリストこそ徴

キリストは聖意を体現した実体です。キリストは十字架に架かり、地上では死人まで甦えらせることをやった。みなこれは聖意の体現であります。キリストは天国を体現して行つ



た。最後の新天新地の徴しるしをそこに現して行つた。キリストこそ徴です。具体的な徴はキリストの全存在なんです。その点では正に福音は徴です。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書は本当にキリストという天国体が顕然と現れている。何と言つたつて、全聖書の中心は福音書です。キリストの直かに現れている事態です。黙示録が示している天国をキリストは既に福音書でもつて示している。天国はこういうところだと。

それがみんなには読めない。ただ、現象を時々喜んでみたりするだけの話で、その奥が捉まえられていない。病いを癒されたことだけをありがたがっていてはダメなんです、もうひとつ奥の世界に入らないから。事業に成功したことを喜んでいたら、そんなものは御利益信仰になってしまう。何だつてそうですよ、その奥の世界に入らなければ。相対的な成功失敗ではない。本当の天国はもうひとつ奥の世界です。

キリストはその天国的な事態を徴に現した。すると今度は、信仰の世界で徴が御利益になつてしまった。御名によつて御利益を現したけれども、それに対してキリストは

「私は知らんよ」

と言われる。恐ろしい言葉です。

「こんなにあなたの為されたようなことをしたのに」

と言つても、キリストは「私は知らん」と。それは本当は聖意を体現しているのではなかつた。キリストの名を借りて、御利益宗教的な現象を現しているだけの話です。

### ●極悪人の砕け

ゲエテが、

「今日為すべきことを明日にのばすな」

「行為また行為だ。これが本当の生活だ」

「はじめ太初に行為があつた」

と言つた。これは、彼がいかに観念信仰に対して戦つたか、その気持の表れなんです。また、この「行為」という言葉にこだわることはないけれども。

我々プロテスタントの今まで学んできたところの信仰では——あなた方は私に直接だから、そうではないけれども——私は無教会にいたから、さんざん

「信仰、信仰。信仰のみの信仰」

と言われて来た。塚本先生がそれを強調していた。私は先生の悪口を言っているのではない。みんな私の恩人です。それぞれの意味があつたから、私は「恩人」と言っている。

十字架上の片一方の盗賊が最後に、さんざん悪い事をして——あれは悪い行為だ、悪行はもろんだメです、聖意を現する行為でなければ——悪行の末に、十字架の上で最後に気持が砕けて、

「御国に入られるときに、せめても私を覚えてください。私はさんざん悪いこ



とを「しました」

と言って平伏した。

「お前は今日、私と一緒に天国だ」

と、悪人に向かつて最大限の言葉をキリストは言われた。地獄に落ちかけていたのを、逆にグーッと天国に上げられてしまった。最初にキリストと一緒にパラダイスに入ったのはこの極悪人だ。

だから、私は「砕け」と言っている。人間的なただ

「真実、不真実。善、悪」

を言っているのではない。そういう相対的な判断は、それは道德の世界では或る意味はあります。けれども、もうひとつ先の世界になると、それをもうひとつ乗り越えなくてはダメです。ユダヤ教はそこを非常にこだわったところがあるから、そいつをキリストは突き抜けてしまったわけだ。詩篇にも、善悪のことを非常に言っているところがあるが、相対的な世界ではダメなんだ、もうひとつ超えなくては。

### ●砕けを無を十字架で賜る

砕けも、砕けきれないんだ。「破れきる」「砕けきる」とさつき私が言ったこの「きる」とか「貫く」とかいうのは十字架に來なければ、それはできない。謙遜なんて言ったって、道德的な謙遜は悪くはないけれども、しかし、本当の謙遜は、十字架に來て、自分はもうこれ以上砕けないものを頂いている。砕けを賜り、無を賜っている。みんなこれは十字架で賜っている。それをカトリックや禅宗は聖道門だから、一生懸命でそれを修養する。行為も修養面が非常にあるわけだ、悪くはないけれども、もつと簡単に、キリストが絶対恩寵の世界をくださっているのがこの十字架ではないですか。どうしてくれるんですか、これを。

私はもう、相対的な自分なんていうものは問題にしてません。何とでも仰ってください、私のことを。結構ですから。私はもうその奥の世界に、はつきりとキリストと一緒にいますから。この賜りたる無の世界には、無限無量なものが、聖霊の無限無量な内容がやってくる。それを大詩篇で私は証をします。それを書くまでは私は死ぬわけにいかん。それはゲートルもダンテも驚くようなものを書いてやるから。こんな大言壮語しましたけれども、それだけの質は来ています。

もう、私の本の書評なんかいらぬ。本当は、私の本の書評なんてものは書けない。書評を頼まれたひとがとうとう書けなくなつて、やめたらしい。結構です。

「ああ、結構です」

と私は答えた。私はキリストの他にいらんものな。

22 その日おおくの者、われに對<sup>むか</sup>いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐<sup>むか</sup>いだし、汝の名によりて多くの能力<sup>ちから</sup>ある業<sup>わざ</sup>を為<sup>な</sup>し



しにあらずや」と言わん。23その時われ明白あらわに告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

これはキリストの名がまじわぎのように使われているんです、「あなたの名によって」というのは。

『我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いだし、汝の名によりて多くの能力ある業を為ししにあらずや』と言ってきたって、私は知らんと言おうぞ」

と。凄いな、イエスは。名を借りてまじわぎにしている、こういうやつは「白きサタン」と、マルチン・ルターが言っている。黒いサタンは分かるけれども、この白いサタンは分かりにくい。

禅宗でも坐禅の前に「作務さむ」をする。作務とは、行の世界、いろいろな労働をすること。自分たちの食べ物を作ったり、野菜を作ったり。禅宗の坊主はただ托鉢でもらっているばかりではない。作務をして、大に行をする。労働をする。作務をしないものは食ってはいかんと。修道院でもそうでしょ、あのトラピストなんてのは。バターを作ったり、ビスケットを作ったり、パンを作ったり、自活できるんです。我々も本当は作務的なことをやらないと、いざというときにダメになる。けれども、作務であろうと、坐禅であろうと、その元を与えているのがこのキリストの福音の世界なんです。

### ●自分がすっ飛んでいる世界

私はこの無の世界に入ってしまうと、いわゆる人間的にどんな偉い人でも、どうということはない。あなた方は一足とびに捉つかまなくなつていいよ、捉んだような顔をしたってダメだよ。本当にその世界に入ったらそうなる。また、その世界に入ってください。別に、のろくても早くても、どうとも言いませんけれども。そうしたらもう、キリストの力が働いてしょうがないよ。

「無」と言うと、何か虚無かと思う。そうじゃない。十字架で自分がすっ飛んでいる世界だから。自分なんていうものは問題になつてない。そうすると、我々に与えられている相対的な才能や資質がみんな絶対的な質をもつて動きだす。決して、単なる禁欲でも、ただいわゆる身心脱落でお終いになつているのでもない。神さまが与えたものはみんな善からざるものなし、という。我々はみんな天下一品に造られている。人を羨うらやむことも妬むこともひとつも要りません。その人を通して、その人でなければ現れないものが、キリストの十字架が賜った無を通して、グーツと上昇カーブで現れてくる。

それがこの身証の世界なんです。身体をもつて証していく。聖意が身体をもつて身証されるためには、その真ん中に無があるわけです。無という焦点を通っていく。これは焦点だから、焦げている。この無は光を発しているんだ。無の焦点を通つて、グーツと上昇して、



無限無量なものが展開していく。疲れを知らない人になる。

本当にその中に入って、もの凄く白熱してごらんよ。風邪なんかすつ飛んで行ってしまうから。

「風邪がはやっていているから、私もかからなければいいが」  
なんてやっているよ、かかっちゃうよ。

「風邪になんか、かかるかっ!」

と言って、それだけの気合をもって行かなければダメです。

どうも、せつかく私がこれだけのことを言っているに、

「いったい、皆さんは受けとっているんですか、どうですか?」

なんて聞きたくなる。なにも疑いませんけれども。私の話を坐って聴いていて、本当に受けとったら、急に叫んだっていいよ。そんなことは遠慮することはない。

「そうだっ!」

と私は言っているから。人が本当に祈っているときに、本当に心から

「アーメン!」

と言いなさい。皆さんはその応じ方が少ない。ダメですよ、そんなことでは。気合ですかね、祈りというものは。体裁の世界ではない。せつかく祈っている人が気の毒ではないですか。頭で祈って理屈を言っていたら、それは「アーメン」とは言えないよ。けれども、本当に神さまに迫って祈ったら、本当に「アーメン」と言って和していかなくてはいかん。もう少し、そういう意味で、御霊の迫力が欲しい。

皆さんは、それがないとは言わないよ、私は。だけど、東京はヘタすると、甘えてしまっているわけだ。私が独りでもって何か天界を走っているようなことで。

「これはいい景色だ。飛行機みたいだ」

なんて見ている。冗談じゃないよ(笑)。あなた方も飛行機になつてくれなければ困るんだよ。あなた方は親しいから、私は勝手なことを言っているんだけど。

●聖霊は何ものとも代えられない

ヨハネ伝6章の52節から、

「<sup>52</sup>ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』<sup>53</sup>イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食くわす、その血を飲まずば、汝らに生命なし。』(ヨハネ6・52～53)

「私の肉を食い、私の血を飲まなければ、生命なし」

と。「我が肉をくらえ」とキリストが言っているのは、

「私の肉は永遠の生命の肉なんだ、私の血は永遠の生命の血なんだ」



ということ。それを具体的な言葉で烈しく言われた。

「観念ではないぞ。本当にこの霊的生命を受けとれ。そのために、私は血を流すんだ。十字架に架かるんだ。祈って待っている。今に、聖霊の火が灯るから」

と。みんなの頭の上に火が燃えているような絵があるね。

人間の魂はそういう絶対的な生命、光、力にでつくわすまでは、本当に満足できないようにできているんです。論より証拠。他のもので

「私はもう素晴らしいところに来てしまつて、もう何も要りません」

と言えるかというところ、みんな言えない。ところが、このキリストの生命の世界に、霊の世界に本当に入ったら、聖霊は何ものとも代えられないということがはっきり言えるんだ。

今度、私は『ホワイト・ホール』という文章（『エン・クリスト』13号、1983年2月冬季号）を書いたでしょ。キリストというホワイト・ホールはグーツと吸い込むんだ。その中に吸い込まなければダメだ。そうしたら、自分自信がホワイト・ホールになって、白く輝くから。これは独和対照の短い文章ですけども、本当に瞑想して祈りこんで、その文字と化体してくださいよ。私はその世界で書いているんだから。そうしたら、あなた方がそれぞれ素晴らしい輝きを発します。

### ●ぶっ倒れることが信

信行一如の世界で、受けとることが最も烈しい全体的な、からだ身体からだの、全存在の行為なんです。信は最も烈しい行為です。そうしたら、このいわゆる行が自然と発生してくる。体現してくる。その信をして信たらしめるものは「十字架と聖霊」です。十字架にでつくわして圧倒されて、

「参りました!」

と言うことが信なんです。ぶっ倒れることが信です。いいですか。心理的に信ずるということではないんですよ、この本当の信というのは。そうしたらば、これは、

「我れキリストと共に十字架せられたり」

とパウロが言った、あの受け方なんです。

「キリストと一緒に十字架されてしまつて、もう私はありません」と。そうすると、その次にパウロは何と言ったか。

「キリストわが内にありて生き給うなり」

と。パウロは「キリスト」と言おうが、「聖霊」と言おうが、「神」と言おうが、これはもう一つで離すことができない。三相一体さんそういつたいになつている。

「キリストが——御霊のキリスト、キリストの御霊が——私の中に入ってきて私は生きてるんだ。この生命は何ものも消すことのできない生命だ」

とパウロは言っている。そのような驚くべき信を彼は賜ったから、

「信仰だけだ」



と言ったときに、彼の行為はもの凄い行為になっている。あのコリント後書11章に書いてある様々な患難に遭った。あれだけの患難に遭えば、普通は倒れてしまう。ところが、つ走って行けたのは、この信に來ているところのキリストの力なんです。だから、パウロはあの百難を突破できた。あれはもの凄い行為です。最期は、彼は殉教の死を遂げる。凱歌をあげて、天国に凱旋してしまふ。

### ● 信行一如

「信行」という名前の人もあるが、信行、一如の世界を身証してもらいたい。この信行の根底は十字架・聖霊にあるということとはもう絶対だから。この焦点があるから、我々はこの十字架・聖霊の焦点をグルグル回っている。どこが間違っているか。私は本当に、牧師さんたちを百人くらい集めて一席やりたいくらいだ。何をゴタゴタしているかと。

エペソ書に

「キリストは一つ、バプテスマは一つ、信仰は一つ、神は一つ」

と書いてあるが、それは「一つ」であることをただ外側から信じたってダメです。その一者と一つになる。一者と一つになって、一如の世界に入らなければ、

「信仰は一つ、バプテスマは一つ」

と言ったってダメです。

「その一如の世界に入れ、一如の世界だぞ」

ということですよ。

「神は一切のものを超越し——超在し、貫在し、遍在し、内在し——自由自在だ」

という。それは神さまは聖霊によってやっているわけです。熾んなる言葉です。もう聖書は本当に熾んなる言葉です。

御名を呼ぶときには、十字架されている世界でもって本当に御名を畏れをもって呼ぶ。

「畏れをもって」

というのは

「平伏して」

ということですよ、「恐がって」ということではない。そして、御名を呼ぶときは、本当に親しく

「お父ちゃん。お母ちゃん」

と言うわけなんだ。それを何かもったいぶたつてしようがない。「お父ちゃん、お母ちゃん」でいい。カトリックでは「お母ちゃん」だね、

「マリヤ、マリヤ」

と言っているから。その親しみと、本当にその中に自分を入れて、救われているという、その平伏しをもって呼ぶときには、一如の世界に入りますから。御名を呼んで一如の世界



に入らないような呼び方だったらダメなんだ。利用しているような呼び方はダメです。利用しているような呼び方をしているから、魔力的に力が働いたけれども、

「ダメだ、そんなものは知るか」

と、キリストは言われたわけです。観念もダメ、御利益もダメ、霊的傲慢もダメ。だから、何と言っても、十字架が土台なんです——このキリスト教も十字架と言っているんだけれども、プロテスタントは——その十字架が本当に入っていれば、もつと聖霊の世界に行くのに、聖霊のことはほとんどおかしなことになっている。生命の世界に入っていないから。

それで、今日のところは、

21 我<sup>むか</sup>に<sup>むか</sup>対<sup>むか</sup>いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいま

す我が父の御意<sup>みこころ</sup>をおこなう者のみ、之に入るべし。

と。キリストに即する者のみ。即身即主です。このことは『キリスト道』（曠愛新書第6号）の中で書きました。この身そのままキリストに即する。これが可能なのは、十字架・聖霊によって即身即主の事態が可能になる。キリストは

「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。

「我を視よ」

と、パウロもペテロも言った。その「我」はキリストに即している我です。十字架によって、破れ切り、砕け切っているわけです。

(参考)

ホワイト・ホール

天韻無鐘

宇宙には望遠鏡でも見えないブラック・ホールと呼ばれている星がある。彼らは超高度の密度のために光をも吸収してしまうからである。

北十字星座にもそういうブラック・ホールがある由。霊界の北十字星はキリストである。私は彼をホワイト・ホールと呼びたい。このホワイト・ホールも無相の相である。彼は聖霊の白光を神秘的に注いでいる。十字の相で彼はどの民族のどの人の魂の扉の前にも立つておられる。全存在を以て彼を呼べば直ちに入つて来られる。キリストがその人に接手し給うや否やからだ<sup>み</sup>が<sup>み</sup>霊<sup>み</sup>的に<sup>み</sup>し<sup>み</sup>び<sup>み</sup>れ<sup>み</sup>聖<sup>み</sup>霊<sup>み</sup>の<sup>み</sup>愛<sup>み</sup>で<sup>み</sup>全<sup>み</sup>身<sup>み</sup>が<sup>み</sup>熱<sup>み</sup>く<sup>み</sup>充<sup>み</sup>た<sup>み</sup>さ<sup>み</sup>れる。

するとその人は新生命が入って来たことを感じ、霊火が点じ、彼自身がホワイト・ホールになったことを覚える。それはキリストの中で無者とされたからである。この小さなホワイト・ホールからその人特有の光が美しくかがやく。

(『エン・クリスト』13号、1983年2月冬季号より)

